

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12256

研究課題名（和文）摂食障害地域家族会の治療的要素の解明：コホート研究デザインによる症状改善率の評価

研究課題名（英文）Association between social support of mothers of patients with eating disorders, maternal mental health, and patient symptomatic severity: A cohort study

研究代表者

香月 富士日 (Katsuki, Fujika)

名古屋市立大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：30361893

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、摂食障害患者の母親が家族会などのサポートを得ることで、家族システムの悪循環が改善され、結果的に患者の摂食障害症状改善に結びつくことを検証することを目的としたコホート研究である。現在は初回調査の解析が終了している。摂食障害と診断された患者とその母親を対象とし、アンケート調査を行った。患者・母ともに回答の得られた57組のデータの解析を行った。その結果、母親がサポートされている実感がある群はない群に比べ、母親の孤独感・抑うつが低かったが、患者の摂食症状などには影響がなかった。また、患者が認識している家族機能が良い群は悪い群に比べ、患者の摂食障害症状が良く、孤独感が低かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、摂食障害患者の母親が家族会などのサポートを得ることで、家族システムの悪循環が改善され、結果的に患者の摂食障害症状改善に結びつくことを検証することを目的として行った。母親がサポートされている実感がある方が母親の精神的健康に良い影響を与えていることが示唆されたが、家族機能や患者の症状・精神的健康などに影響を与えるという結果は得られなかった。摂食障害患者の家族は疾患の特徴から巻き込まれることが多く疲弊している。家族へのサポートが家族のメンタルヘルスの維持向上には重要であり、家族自身のうつ病予防などに役立つことが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate how social support of mothers who are caregivers of patients with an eating disorder affects the mothers themselves and the patients. Fifty seven pairs of participants were recruited from four family self-help groups and one university hospital in Japan. Mothers were evaluated for social support, for self-efficacy, for loneliness, for listening attitude, for family functioning, and for depression symptoms. Patients were evaluated for loneliness, for self-esteem, for assertion, and for their symptoms. Mothers who had high social support showed lower scores for loneliness and depression. We found no significant differences in any patient scores compared based on mother's level of social support. Mothers' feelings of support seem to be related to their low loneliness and depression levels, but were not associated with patients' eating disorders symptoms, loneliness, self-esteem, or assertion.

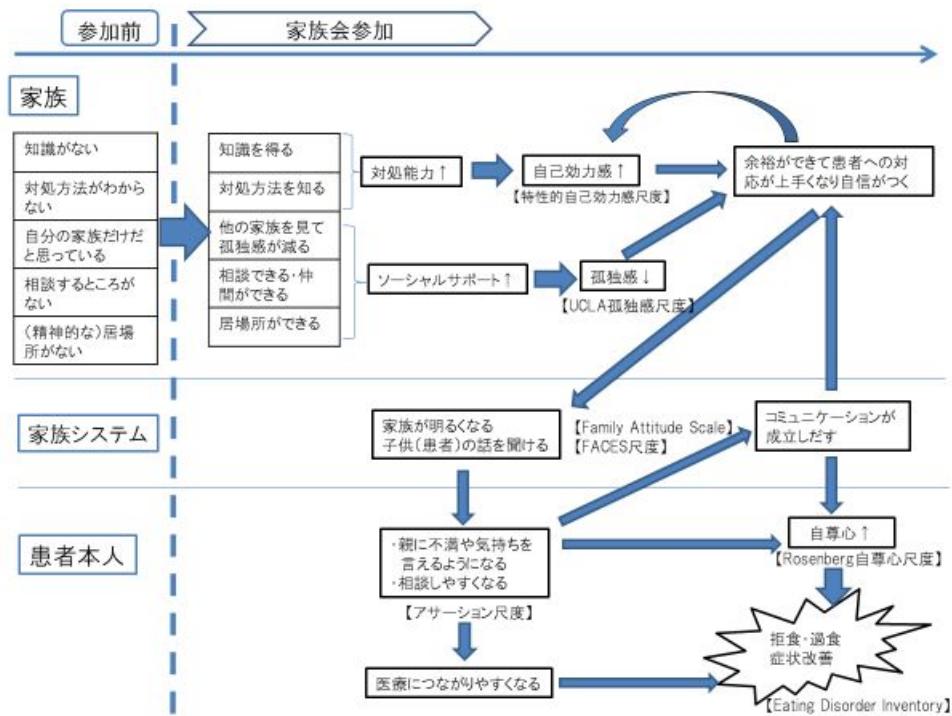
研究分野：精神看護学

キーワード：摂食障害 家族ケア

1. 研究開始当初の背景

摂食障害には、拒食症(Anorexia Nervosa; AN)や過食症(Bulimia Nervosa; BN)などがあり、精神疾患の中では非常に高い死亡率(7~10%)を有している深刻な疾患である。摂食障害は若年女性を中心に1980年からの20年間で日本では10倍に増加しているが、近年は慢性化や結婚後の発症など必ずしも若年女性に限られた疾患ではなくなっている。AN治療では、家族療法に対して中等度、抗うつ薬や抗精神病薬については弱いエビデンスが示されており、BN治療では、抗うつ薬や認知行動療法に対して強いエビデンスが示されている。しかしながら日本では、訓練された専門家の数は非常に限られており、現実には多くの患者が十分治療できないまま在宅生活を送っている。申請者らの研究チームでは、先行研究において患者のやせ願望と家庭内暴力との強い関連を報告している。また、摂食障害患者は否認が強くしばしば治療を拒否することや、家族を情緒的に巻き込むことなどから同居家族の精神的負担は非常に大きい。

日本では伝統的に精神障害者のセルフヘルプグループのひとつである地域家族会が発展しており、摂食障害の地域家族会も療養上の重要な役割を担っている。摂食障害の治療支援体制が急速には広がらない日本において、その代替機能を担う地域家族会を発展させていくためには、家族会の治療的要素を明確にしていくことが重要である。申請者は10年程摂食障害地域家族会で心理教育的サポート(疾患・治療・対応方法についての情報提供と対処方法の共同考案)を行ってきた。また申請者らの研究チームは長期にわたり精神疾患の家族介入についての研究を積み重ねてきた。これらの知見と実践経験から、家族が家族会でサポートを受けることで孤独感が減り、知識や具体的な対応方法を知ることによって患者とのコミュニケーションが改善し(家族システムの変化)、結果的に患者の症状改善を促進するのではないかと予測した。(図)



2. 研究の目的

本研究の目的は、家族会のような治療的要素が患者の症状改善に寄与するかを縦断的に探索することである。

3. 研究の方法

(1) 対象者

患者： 医療機関で摂食障害の診断を受けたことがある 16歳から50歳 女性
 母親： 患者の母親または養育者にあたる女性 同居または別居しているもの 30歳から85歳

(2) 調査方法： 研究対象者の募集は、名古屋市立大学病院こころの医療センター外来および入院病棟または摂食障害地域家族会にて行った。初回調査は、研究の説明後に手渡しにて配布し郵送にて返送してもらう。初回質問紙調査を時点 T0 とする。登録完了後 9ヶ月後の調査を時点 T1、18ヶ月後調査を時点 T2 とする。患者、母親ともに質問紙調査は T0、T1、T2 の3回行う。横断研究のデータは時点 T0 のものを用いた。

(3) 調査項目：基本属性の他に下記の質問紙を用いて調査を行った。

患者： 自尊心 (Rosenberg Self-esteem Scale 日本語版)、 孤独感 (UCLA 孤独感尺度)、 アサーション (青年用アサーション尺度)、 摂食障害症状 (Eating Disorder Inventory)、 家族機能 (Family Assessment Device)

母親： サポート状況 (Social Provisions Scale-10)、 自己効力感 (一般性セルフエフィシー尺度)、 孤独感 (UCLA 孤独感尺度)、 傾聴 (積極的傾聴態度評価尺度)、 抑うつ (Beck Depression Inventory-II)、 精神的健康度 (K6)

(4) 解析方法

横断研究：横断研究に関しては SPS-10 得点で分けた 2 群間の検定を T 検定、 χ^2 検定を用いて行った。

コホート研究：患者の摂食障害症状の変化 (T0-T2) を従属変数とし、以下の変数 (T0 時点での母親の孤独感・自己効力感・アサーション・不安抑うつの状況、T0 時点での患者の評価した家族機能、T0 時点での患者の自尊心・孤独感・アサーション、T0-T1 の母親の孤独感・自己効力感・アサーション・不安抑うつの状況の変化量) を独立変数として回帰分析を行う。また、T0-T2 の母親の孤独感・自己効力感・アサーション・不安抑うつ各尺度の変化量と T0-T2 の患者の評価した家族機能、患者の自尊心・孤独感・アサーション各尺度の変化量との相関を分析する。

4. 研究成果

(1) 患者・母ともに回答の得られた 57 組 (114 名) のデータの解析を行った。患者の平均年齢は 24.5 ± 6.9 歳、母親の平均年齢は 54.7 ± 6.6 歳であった。患者の平均罹患期間は 7.6 ± 5.5 年であった。母親自身がカウンセリングを受けている人は 9 人 (15.8%)、過去に受けていた人は 24 人 (42.1%) であった。夫婦で相談しながら患者に対応できているかについては、31 名 (54.4%) ができている、6 名 (10.5%) ができていないだった。

(2) 母親がサポートされている実感がある群 (SPS-10 得点が高い群) と母親がサポートされている実感が無い群 (SPS-10 得点が低い群) の 2 群で各尺度得点の比較を行った。その結果、サポートされている実感がある群の方が母親の孤独感 (ULS)・抑うつ (BDI-II) が有意に低かったが、患者の摂食症状などには影響がなかった。患者のみデータからは、患者が認識している家族機能が良い群 (FAD 得点高群) は悪い群 (FAD 得点低群) に比べ、患者の摂食障害症状が良く、孤独感が低く、よりアサーティブな表現ができていた。母親がサポートされている実感がある方が母親の精神的健康に良い影響を与えていることが示唆されたが、家族機能や患者の症状・精神的健康度などに影響を与えるという結果は得られなかった。

(3) 3 時点を追跡したコホートデータは、現在解析中である。

表：母親がサポートされている実感がある群 (SPS-10 得点が高い群) と母親がサポートされている実感が無い群 (SPS-10 得点が低い群) の 2 群で各尺度得点の比較

Scale	High-score group†			Low-score group†			p
	n	Mean	SD	n	Mean	SD	
GSES	28	7.5	6.8	29	4.2	4.0	.562
ULS	28	33.0	6.4	27	45.5	8.3	<.001
ALAS	28	36.8	8.2	28	35.3	5.7	.418
BDI-II	28	11.1	8.8	29	16.5	11.2	.048
K6	28	6.0	4.1	28	7.8	4.7	.124

Notes. ULS = University of California, Los Angeles Loneliness Scale; ALAS = Active Listening Attitude Scale; BDI-II = Beck Depression Inventory-Second Edition; K6 = Kessler Psychological Distress Scale; GSES = General Self-Efficacy Scale. †The groups were divided based on the mother's score being higher or lower than 31 points in the Social Provisions Scale Japanese version (SPS-10).

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Katsuki F, Takeuchi H, Inagaki T, Maeda T, Kubota Y, Shiraishi N, Tabuse H, Kato T, Yamada A, Watanabe N, Akechi T, Furukawa TA.	4. 巻 18
2. 論文標題 Brief multifamily Psychoeducation for family members of patients with chronic major depression: a randomized controlled trial.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 BMC Psychiatry	6. 最初と最後の頁 207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s12888-018-1788-6.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 香月富士日, 鈴木高男
2. 発表標題 摂食障害地域家族会の治療的要素の解明
3. 学会等名 日本心理教育家族教室ネットワーク第22回研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 香月富士日, 鈴木高男, 山田敦朗, 渡辺範雄, 近藤真前
2. 発表標題 摂食障害患者の母親へのサポートが療養に与える影響の探索
3. 学会等名 第23回日本摂食障害学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山田 敦朗 (Yamada Atsurou) (10315880)	名古屋市立大学・大学院医学研究科・講師 (23903)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	白石 直 (Shiraishi nao) (30632989)	名古屋市立大学・大学院医学研究科・助教 (23903)	